二十世紀の十大小説

篠田一士

A la recherche du temps perdu ◉ *Marcel Proust*
Ficciones ◉ *Jorge Luis Borges*
Das Schloß ◉ *Franz Kafka*
子夜 ◉ 茅盾
U·S·A ◉ *John Dos Passos*
Absalom, Absalom! ◉ *William Faulkner*
Cien Años de Soledad ◉ *Gabriel García Márquez*
Ulysses ◉ *James Joyce*
Der Mann ōhne Eigenschafen ◉ *Robert Musil*
夜明け前 ◉ 島崎藤村

新潮社

二十世紀の十大小説

篠田一士

新潮社

二十世紀の十大小説

篠田一士著

発　行　1988年11月25日
3　刷　1989年2月5日

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社
162 東京都新宿区矢来町71
振替東京4－808
電話・業務部 03(266)5111
編集部 03(266)5411

印刷所　二光印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社
定　価　2300円

© Hazime Shinoda 1988,
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-353302-1 C0095

二十世紀の十大小説・目次

多元化する世界文学のなかで　5

☆

『失われた時を求めて』（プルースト）―― 49
『伝奇集』（ボルヘス）―― 135
『城』（カフカ）―― 159
『子夜』（茅盾）―― 199
『U・S・A』（ドス・パソス）―― 235

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

『アブサロム、アブサロム！』（フォークナー）―― 273
『百年の孤独』（ガルシア＝マルケス）―― 313
『ユリシーズ』（ジョイス）―― 349
『特性のない男』（ムジール）―― 389
『夜明け前』（島崎藤村）―― 439
☆
後書き 473

装幀　大塚雅子

多元化する世界文学のなかで

I

タイトルを記してみて、いまさらのように、神をも畏れぬおおけなさというか、その阿呆らしさを、つくづく思い知る。しかし、これは、与えられた題名ではなく、みずから選んだものである。もちろん、このタイトルは、世俗の、たんなる方便にすぎない。だからこそ、阿呆らしい、つまり、批評の篩(ふるい)に、まったくかけられていない、無邪気といえば、このうえもなく無邪気な題目を掲げたことになるが、ぼくとしては、それなりの批評的底意をもって、あえて、これを選んだのである。従って、この序の章は、どこから見ても、キンキラキンの、馬鹿馬鹿しい題名にこめられた、批評的意図、いや、批評への意志をあきらかにすることに費される。

二十世紀の十大小説という題名を思いついたのは、おそらく、ぼくの記憶の隅に、サマセット・モームの『世界の十大小説』があったからだろうと思う。岩波新書で、上下二冊から成る、西川正身さんの訳本がでたのは一九六〇年。六〇年代から七〇年代はじめにかけて、ずいぶんと読まれ、多くの版を重ねたようである。このところ、十年以上も絶版状態がつづいていたが、ごく最近復刊され、手軽に読むことができるようになったのは朗報というべきだろう。絶版になった事情は、出版社にたずねるしかないが、思うに、モームが読まれなくなったというより

も、モームの小説をも含め、いわゆる世界文学全集に収められるような、外国文学、とりわけ、小説類が、一般読者から遠ざけられ、遠のいた事情による。こうした情況は、七〇年代の半ば前後からあらわとなり、現在にいたって、なんら変ることなく、事態の新しい変化は、容易に見出せそうにはない。言い添えれば、外国文学、つまり、翻訳小説の不況は、今日、だれもが異口同音に言いたてる文学不振と、かならずしも無関係ではない、いや、大いに関わり合いがあるはずだが、それは、また、後日の論題にしたい。

ところで、モームの『世界の十大小説』だが、この題名は、原題そのままではない。原作については、いささか込み入った事情があるので、訳者の西川さんの「あとがき」の一節を引いておく。

モームは、数年前、アメリカをおとずれたさい、世界の十大小説と彼が考える作品のリストを作ってほしいと、雑誌レッドブックから言われた。そこで依頼通りのリストを作り、それで話はおわったものと思っていたところ、そのリストが発表になってまもなく、今度はリストにえらんだ十篇の小説の要約版を、その一つ一つにモーム自身の解説を附して出したいと、ある出版社が言ってきた。その依頼も果し、解説の文章は、それぞれの作品の序文として発表されただけでなく、その大部分が雑誌アトランティック・マンスリーに掲載された。のち一九四八年、それらの文章は、全面的に手を入れて一冊にまとめられ、"Great Novelists and Their Novels"と題して、フィラデルフィアの出版社から上梓された。それから数年後、モームはそれにさらに訂正加筆をこころみ、改めて出版した。それが"Ten Novels and Their Authors"で、本書の訳は、著者の希望もあって、このほうによった。（中略）……

それにしてもこの『世界の十大小説』ほど、新旧両版のあいだに大きな違いが見られる作品はほかにない。取り上げている作者と作品は全く同じであるが、作品の並べ方が、旧版ではいわば気まぐれであったのに対し、新版では作者の生年の順に従っているのは大した違いではないとして、ある章などはほとんど完全に書き改められており、分量の点だけについて言ってみても、新版は旧版のおよそ一倍半にふえている。そしてその結果は、全体に豊かさを加え、そうでなくても面白く読めたのが、なお一層面白く読めるようになっているのである。

つまり、『世界の十大小説』という訳題をもつ、この本は四つの段階を経て、ようやく出来上ったという次第で、第一に作品のリスト・アップ、第二に序文執筆、第三に、それをまとめ、手直ししたうえで、『大小説家たちとその作品』という表題で単行本として出版し、第四に、今度は、さらに大幅な加筆をほどこし、表題も、『十冊の小説とその作者たち』と改め、新しい版本を出すにいたったのである。『世界の十大小説』に当るような原題は、どこにもないじゃないかなどといった非難を、ここでするつもりはない。経緯をふりかえってみれば、西川さんが、『世界の十大小説』という日本語の訳題をつけたのは、ごく自然の成行きで、この「世界」は、われわれが親しんできた「世界文学全集」のそれと同じに考えればよろしいのである。

それはそれとして、この書誌的経緯を読んで、ぼくが興味をそそられたのは、『世界の十大小説』にいたるまでの過程において、主(ぬし)は変るが、依頼者のアメリカ側の出版人と、モームそのひとの思惑とが、微妙なところで、いつもずれているのではないかという推測である。打ち明けていえば、こういうことだ。アメリカ側の出版人は、いつも、「十大」の「大」、すなわち、「偉大な」(great)ということにこだわりつづけるのに対し、モーム自身の心底では、なにもそ

んなことに血道をあげ、それほど目くじらをたてることもあるまいという気持が、あらわでないまでも、ほとんど透けて見えるようである。現に、最終版の表題は『十冊の小説とその作者たち』と、まことにおとなしやか、ケレンがまったくないどころか、とっかかりようもないほど平穏無事なものになっているではないか。内容を読みかえしてみたうえで、いま少しばかり、この無愛想な表題に色つけをし、作者の真意のほどをあきらかにしたいとすれば、やはり、《My favourite》といった形容句を付け加えたくなるくらいである。

「私の好きな」、つまり、作者モームが、長い生涯に何度も何度も読みかえし、当の作品のすばらしさを十分賞味し、完全に自家薬籠中のものにしていることは、十篇のエッセーのどれを読んでも自明の事柄だが、だからといって、彼は、ここに取りあげた十冊の小説にしがみつき、いたずらに、わが仏尊しとしているわけではない。モームの読書量は、おどろくほど広く、しかも、同時代のイギリス作家、いや、批評家をも含めていいが、世にいうイギリス的島国性から、みごとなほど解き放たれているのである。十冊の小説のうち、イギリス小説は、半ばにも達しない四冊だけ、あとは、アメリカ小説が一冊、フランス小説が三冊、ロシア小説二冊という内訳だ。

この種の選択には、かならず読者からの疑問が投げかけられる。えらばれたAなる作品が名作であることは認めるが、本当は、えらばれなかったBなる作品の方が、もっとすぐれているのではないか、どうして、貴君はBを無視したかといった類の問いかけである。こうした疑問にも、できるかぎり応答できるよう、モームは、篇中、いたるところに、それらしき説明文を書きこみ、ときには、武断的な卒直さ、いや、挑戦的な身構えさえ、誇示しようとする。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

フローベールの『感情教育』と言えば、多くのすぐれた批評家の間でひじょうに評判がいい小説であるが、主人公にえらんだ人物というのが、まるで特徴のない、退屈で下らない男であるもので、そんな男が何をしようと、その身の上にどんなことが起ろうと、一向に関心が持てず、その結果、いろいろと長所があるにもかかわらず、読み通すのが困難な作品となっている。私はいま、作中人物は個性の目をもって眺めねばならないと言ったが、その理由を一応説明しておこうと思う。小説家に全く新しい人物を作り出すことを期待するのは、むりな注文というものである。小説家が題材に使うのは人間性で、もちろんこの世の中にはあらゆる種類の人間がおりはするものの、その種類が無限ではない上に、何百年もの昔から、さまざまな小説や物語や戯曲や叙事詩が書かれてきているのであるから、いま改めて完全に新しい人物を作り出す見込みはまことに少ない。小説の全歴史を振り返ってみて、これこそ絶対に独創的と言い得る人物は、私が思い出す限り、ひとりドン・キホーテがあるだけだが、そのドン・キホーテにしても、誰かある学殖豊かな批評家が、やはり遠い祖先があることを発見したとしても、私は別に驚きはしない。小説家たる者は、その作り出した人物を自分自身の個性を通して眺めることができ、かつその個性が非凡なものであって、それらの人物を、錯覚にせよ、独創的な人物だと思わせることができれば、幸いと言うべきである。

モームは『十大小説』のなかで、『ボヴァリー夫人』を取りあげ、この小説について、痒いところにも手が届くような懇切な評釈をほどこしている。それはそれでいい。ところが、『感情教育』に対しては、なんという冷淡さ！　いや、無理解というよりは、ことさらに、それを装い、衒った挙句、いたずらに激語を弄している気配も、評語の内外に読みとれ、批評家を怒

らしてやろうという底意さえ、ありありと読みとれ、正直言って、あまり愉快ではない。たとえ『感情教育』はつまらない小説という評価を、それなりに尊重し、いかにもモームらしいと納得するとしても、この程度の評語では、作品の、ほんの上っ面を逆撫でしたにすぎず、やはり、本意は、『感情教育』讃美の批評家たちの反撥を誘いだすためではなかったかと、つまらないカングリまでしたくなるほどだ。

しかし、これにつづく、モーム自身の小説観、すなわち、小説において、新しい、つまり、独創的な人物像をつくりだすことは、基本的には、いまや不可能なので、そういうことを志すのは、ほとんど意味がない、せいぜい、作者自身の非凡な個性を媒体にして、独創的という錯覚を、読者に与えれば上々といった意見は、一応、注目に値する。これは、小説ジャンルのもつ、創造的意味合いを全否定しないまでも、それへのもっともペシミスティックな考え方の表明といってよく、しかも、これが、二十世紀の半ば、それほど尊敬はされないにしても、当世第一の読者数を誇る、経験も知恵も、人並以上にめぐまれた小説家そのひとによって行われたということ、これも、また、記憶に値する。

さらに、この小説家は、人間性の普遍、それは、空間においても、時間においても不変であるという、十八世紀の擬古典主義者顔負けの古典主義の信奉者である。こうした古典主義と、小説創造の新しい掘りおこしに対する絶望、いや、不信が表裏一体となったとき、彼は、一応は均整のとれた、外見にはいい文章だが、内容は貧困といった、いわゆるミドル・スタイルの小説言語を駆使し、日本風に言い直せば、中間小説の名作を、つぎつぎと書くことになるのである。ストーリーのつくりは抜群になめらかだが、人物像は、すべて類型的で、中味にとぼしく、そして、その間、作者得意の、ルーティン化した、人生智のシニシズムの粉末がふりかけ

られ、無邪気な読者は、なにか人の世の深部を心安立てにのぞきみさせてもらったような気持になるのは、やはり、作家、サマセット・モームは只者ではなかったという証だろう。

いつまでも、モームにこだわるようだが、さきほど、ぼく自身、興味をそそられたと記した事柄については、放っぽりだしたまま、別の話題に移ってしまったから、ここで、一度、話を元へもどす。それは、モーム自身は、それほど気にもしないのに、アメリカ出版界の依頼者たちが一様に関心をもちつづけた事柄である。すなわち、「世界の十大小説」という番付趣味への偏執だ。問題は、この「世界」と、「十大」の、とりわけ、「大」への執着である。それは、なんでもない。作家と出版人では、立場がちがう。商売になればこそ、偏執も生まれ、執着もするのだと、明快に裁いてみせる人もいるかもしれないが、実はそうではない。ヨーロッパだったら、こうした「世界の十大ナントカ」といった企画は、まずは、ほとんど目にしない。はっきり言って、こうした偏執は、後進国、いや、後進国だと、半ばみずからを責めるように、たえず思いつめている国に特有な現象なのである。事実、ヨーロッパでも、フランスやイギリスでは、「世界の十大小説」は商売にならないが、この二国に対して後進国意識をもつ、ドイツあたりでは、「ツァイト」のような高級週刊誌が、二度にわたって、「百冊の本」の選定会を大々的に行えば、そのコメント集が本になったりして、また、それがよく売れているようだ。

アメリカの場合は、この「世界」のなかに「大」をもとめる志向は、伝統的といっていいくらい、根づよいものがあり、「世界最大の文学はなにか」、あるいは、「アメリカ文学の最高作はなにか」といった問いかけは、隠顕さまざまながら、どのアメリカ人の心のなかでも反芻されているようである。言わず語らず、批評家たちは、アメリカ最大の小説がなにかを発見し、その訳柄を論じ立てることにムキになるし、小説家は小説家で、われこそは、アメリカ最大の

小説を書かんと、タイプのキーを一入力をこめてたたくのである。この間の事情を、たくみに織りこんで、現代アメリカ社会を痛烈に諷刺した、すぐれた小説に、フィリップ・ロスの『素晴らしいアメリカ野球』があることは、アメリカ小説好きの読者なら、先刻承知だろう。これは苦心の訳題だが、原題は《The Great American Novel》であることを、念のため記しておく。

これに対して、ヨーロッパ人であるモームには、もともと、「世界の大小説はなにか」といった類の問いかけは、無意味でないまでも、アメリカ人、それに、われわれ日本人とくらべて、それほどに切実な事柄であろうはずはなかった。そもそも、小説はヨーロッパ人のものだという思いこみが、ほとんど生得のように、抜きがたくそなわっていて、その訳柄をたずねれば、小説は、近代小説と言い直そうか、それは、はじめにイギリス人がつくり、そのあと、フランス人、ドイツ人、そして、ロシア人が、それぞれ、腕によりをかけて磨きをかけ、多彩な展開を行った文学ジャンルだといった、一応、筋道のたった、もっともらしい返答がかえってくるようである。つまり、一口でいえば、小説は自分たちのものだ、自分たちが生みだし、育てあげたものだという意識が、いささかの疑いの余地もないほど身についていて、それは、もはや意識というよりは、無意識の領域に属するといってもいい。いまさっき、生得とぼくが言ったのは、この意味合いである。

そうであれば、「世界の大小説はなにか」と、アメリカ人のように騒ぎまわったり、日本人のように、四方八方目配りを働かせ、孜孜営営、プログラムづくりを何度も何度もくりかえす必要もない。「世界の大小説」は、自分たちの財産なのだから、いつだって、手元にちゃんとある。その気になれば、すぐ取りだせるのだから、財産目録などといったものを、急かされたようにして、あわただしく作成し、それを、ことごとしく公表することもあるまいといった、落

着きというか、余裕を、いつも持ちつづけてきたのである。これを、ヨーロッパ人の知的傲慢といっても、はじまらない。どの民族、どの人種にだって、その種の傲慢さをいだく因子はあるわけで、ヨーロッパ人だけが、特別、傲慢というわけではない。いまの場合、問題があるとすれば、近代小説を、あたかもヨーロッパ人の独占物であるかのごとく思いこみ、思いこませてしまった、非ヨーロッパ人の存在である。そこには、アメリカ人、日本人はもちろんのこととして、ディケンズは北京の雑沓をえがきだしていると、ダブル・フォーカスの読み方をした、老舎のような中国人や、『ゴリオ爺さん』を読んで、「バルザックは自分たちのことを書いててくれる」と、熱狂の叫び声をあげたセネガル出身の黒人のパリ留学生も、当然含まれるのである。

小説、いや、近代小説とはっきり言い直そう、それは、決してヨーロッパ人の独占物ではなかった。話を十八世紀後半から十九世紀一杯にかけて言えば、近代小説というべきものの主流は、たしかにヨーロッパのそれだっただろう。つまり、駕籠、または、馬を捨てて、蒸気機関車、あるいは、木造船から鋼鉄艦への移行を、いわゆる文明開化の近代化とよび、そうした新しい「文明」の武器をつくりだした、ヨーロッパ人による、旺盛な植民、すなわち、帝国主義的な世界統一という大勢を思いやるならば、同時代のヨーロッパの小説が、近代小説の主流を形づくることは、当然の筋道だろう。なぜならば、詩とちがって、小説ジャンルは、いかに言語機能の自立性を目指したところで、現実世界のもつ日常性との絆を断ち切ることは叶わず、形姿さまざま、複雑にして、多様な外界の事象がくりひろげる運動との結縁を保たなくてはならないからである。とりわけ、一七四〇年代のイギリス小説に端を発した、ヨーロッパの近代小説は、この現実世界との関わり合いの因果を尊しとし、それこそ、新しい文学ジャンルがつ

くりだした、前古未曾有の詩学の成果だという錯覚を与えるにいたったのである。前古未曾有は、たしかにそうかもしれないが、この新しいジャンルが文学そのものの本質を揺りうごかし、面目一新、古きを、すべて投げ打たせるものでなかったことを、いまにして、ようやく、われわれは思い知ろうとしている。

だが、ヨーロッパ人による「文明開化」の大波が、世界のいたるところに押し寄せる時代においては、錯覚は新発見として、多くの人びとの心を奪い、彼らに、ヨーロッパの近代小説へのひたむきな志向を根づよく植えつけることになった。さきに、近代小説の主流といったのは、こうした情況を踏まえてのことだが、『若きヴェルテルの悩み』が世に現われる二十年まえに、『紅楼夢』が完成したことを、今日の文学史は、ちゃんと記録しているし、ゲーテを読み、『紅楼夢』をも読むひとは、中国、日本には、すでに多くを数えるが、今日では、ヨーロッパ人にも少なくないのである。さらに、オースティンの『高慢と偏見』が刊行された一八一三年の二年まえには、『南総里見八犬伝』が書きはじめられ、以来三十年の歳月を費して、この長大無比の傑作小説は、めでたく完成することになる。今日においても、なおかつ、『八犬伝』を近代小説ではないと、鼻であしらう向きはあるかもしれない。しかし、それは括弧つき、すなわち、「ヨーロッパの」という限定語をふったうえでの話だ。括弧をはずし、虚心に、『八犬伝』を読んでみれば、その半ばにいたらずして、この大長篇が成就した、自在闊達にして、深大な文学性の富を疑うひとは、まずいないだろう。

モームは『世界の十大小説』のひとつに、『高慢と偏見』をえらび、たえず慈むような眼ざしで、その魅力を綿綿と語っているけれども、この小説と時を同じくして、『八犬伝』の壮挙が行われたことは、知りもしなかったし、また、知ろうともしなかった。いや、知らなくても

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com